

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏

第5話



俗名を高らかに名乗った瀧覚は、しばらく黙したまま手綱を繰った。多聞丸と雉丸を乗せた栗毛が並行する。「案内したい場所がある」と瀧覚が赤阪の手前で言い、二人は随行するこ
とにした。瀧覚が語り始めたのは、甘南備(富田林)の林に差し掛かった時だった。

―我が高祖父、和田左衛門尉義盛は―

その名は、琵琶法師が謡う「平家物語」にも登場する鎌倉幕府初代侍所別当(軍司令官)で、二人もよく知っていた。治承四年(一一八〇年)、伊豆の北条氏ら僅か百騎余りで挙兵した源頼朝に加勢する為、三浦半島の衣笠城を出た三浦義澄率いる五百騎の先鋒にかれはいた。が、折からの大雨で足止めを喰らっている間に大庭・伊東の大軍に挟撃された頼朝軍は、石橋山で北条の惣領・宗時らを失う大敗北に遭い、海上に逃げた。衣笠城に平家方が迫るなか、九十歳の祖父・三浦大介義明が「武衛(頼朝)を扶け、子孫を繁栄させよ」と、たった一人で籠城し討ち死にした。その遺命を守り三浦党は相模湾上で頼朝を救出。その時義盛は「大願成就の暁には、我を侍所の長に」とねだった。頼朝は笑って了承した。

平家追討軍の先鋒として山陽道を遠征し、九州で平家の退路遮断に貢献した義盛は、戦後の論功行賞で左衛門尉の官職とともに望み通りの侍所別当に就任。頼朝の死後、未熟な二代将軍・頼家を補佐する「十三人の合議制」の一人として、引き続き軍事を掌握した。

梶原景時、比企能員、畠山重忠など幕府樹立に功績のあった者たちが北条氏によって肅清されるなか、三浦党の事実上の長として北条氏と共闘。頼家が伊豆の修善寺でその短い生涯を閉じた後、三代将軍となった実朝に近侍した孫の小太郎がその一字を賜って「朝盛」を名乗るなど、順風にみえる和田一族であったが、執権として幕政の全権掌握を謀る北条義時は、頼家の遺児擁立に義盛の子息たちが加担したと挑発。無骨な鎌倉武士の典型である義盛とその一族は後に「和田合戦」と呼ばれる挙兵に至るが、三浦党の嫡流である義村が翻意。鎌倉を火の海にしたと伝わる激しい市街戦の末、義盛以下多くの者が討ち死にした。

瀧覚が時折みる『担がれて逃げる夢』は、この折の父の体験談である。父は大叔父に当たる義盛三男・朝比奈三郎義秀によって信州に落とされ、その父で瀧覚の祖父に当たる朝盛は戦線を離脱した後、七年余の潜伏の後、承久3年（1221年）、打倒・北条義時をスローガンに後鳥羽上皇が西日本の武士を募って挙兵した「承久の乱」に参加。乱は、尼将軍・政子の名演説と、義時の嫡男・泰時や弟・時房らによる電光石火の京都攻略で瞬く間に鎮圧され、後鳥羽・順徳・土御門の三上皇は流罪。朝盛も消息を絶ち、幕府方として戦った朝盛の子供の家系から戦国期の織田家家老・佐久間信盛や幕末の佐久間象山が出る。

信州から飛騨へと落ち延びた父は、密かに元服し和田家の嫡流である「小太郎」と、鎌倉殿から賜った「朝」の一字を継いで「朝正」と名乗ったが、生涯その名を名乗ることなく死んだ。

瀧覚は幼名・小太郎のまま僧になった。

三人は高野街道の交わる三日市宿（河内長野）に出た。眼前に岩湧山の山稜が迫る。

―三浦の嫡流も最明寺殿（5代執権時頼）との戦で潰えた、その宝治の戦で…―
再び黙した瀧覚が手綱を緩める、多聞丸が続く。

山裾へと続く坂道の中腹に小さな庵がある。話の続きはそこでするらしい。

坂道の両脇で遅咲きの桜並木が満開を迎えている。